

Title	日本語の「主題」をめぐる基礎論
Author(s)	堀川, 智也
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2010, 4, p. 103-117
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/9946">https://hdl.handle.net/11094/9946</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 日本語の「主題」をめぐる基礎論

堀川 智也\*

HORIKAWA Tomoya

Abstract :

### Foundation Theory Regarding “Topic” in Japanese

The discussion concerning a subject and a topic in Japanese has two or more standpoints where a basic opinion is different. What is a fundamental character of the particle ‘wa’ and “ga”? How should we define the topic and the subject in a Japanese grammar? Should two questions be any relations? It is extremely difficult to answer this question. Is a “topic” a concept that should be discussed in the discourse, or should treat in one sentence? These two opinions conflict over this problem now. In this paper, I insist tha it is necessary to discuss a Japanese topic within one sentence based on an essential characteristic of the particle ‘wa’. The function of this particle divides the sentence back and forth with a point in one sentence.

There were a lot of discussions that the function of this particle ‘wa’ was limited to ‘the topic presentation’ or ‘the comparison’ so far. However this particle has the usage that doesn’t correspond to the two. Based on this fact, the discussion over the particle ‘wa’ and the discussion over the topic in Japanese should be discussed in another dimensions.

**Keywords :** Subject, topic word, topic-comment structure, discourse

**キーワード :** 主語, 題目語, 題目解説構文, 談話

#### 0. はじめに

日本語の主題・主語をめぐる議論は、ハとガの使い分けという観点とからめながら、夥しい量の研究が蓄積されてきた。その中には、非常に基本的なところで立場を異にするいくつかの見解がある。その一つは、「主題」とは一文内で規定される概念か、一文を超えた談話・テキストにかかわる概念か、という問題である。第二に、ハヤガという助詞のも

---

\* 大阪大学世界言語研究センター・准教授

つ固有の論理、個性を問う助詞論としての議論と、「主題」「主語」をどう規定するかという主題論・主語論としての議論という二つの次元の異なる議論の関係をどのように考えるか、という問題である。そこで本稿では、この二つの問題について筆者なりの立場を整理し、この問題をめぐる基本的立場を確認することにしたい。

## 1. 助詞論と題目語論

従来、日本語の主題・主語をめぐる議論はハとガの使い分けという観点で展開されることが多かった。しかしこの観点での議論のほとんどは、暗黙のうちに、ハは主題（題目・題目語）または対比（対照）のいずれかを表す助詞であり、ガは主語を表す助詞だという了解を前提としている<sup>1</sup>。しかし、この前提は本当に確かなのかを、主にハをめぐる改めて問うのが本章の課題である。

ハという助詞の用法が「題目」または「対比」のいずれかに限られるなら、「対比」ではない場合の用法は「題目提示」であり、そこでハが果たしている機能は無条件に「題目提示」だという強力な前提をとることになる。即ち、「対比」ではなければ「題目提示」であり、「題目提示」でなければ「対比」だとする二者択一的、相互排他的に両者の関係をとらえる見方にたつことになる。

これは、ハに「題目提示」と「対比」という明確に峻別できる二つの意味用法があり、二つのハは別物として分別すべきだという整理を採用する見方と軌を一にする。このように両者を別物として峻別する見解は、古くは時枝 [1950] に見られる。時枝 [1950: 186-189] は、ハを「格を表はす助詞」と「限定を表はす助詞」の二つに分ける。いいかえれば格助詞のハと副助詞のハという二種の異なるハをたてるという見解である。

次に久野暲 [1973: 30-31] は、主題を表わす「ハ」と対照を表わす「ハ」という二種のハを明確に峻別し、もし一つの文の中に、二つの或いは、それ以上の「ハ」が現れる場合には、最初の「ハ」だけが主題を表わし、残りは対照を表わす、と主張する。

- (1) a. 私ハタバコハ吸います。  
b. 私ハタバコハ吸いません。  
c. 私ハタバコハ吸いません。

ここで久野は、(1) a. の「タバコハ」は比較対照の意味合いが極めて強く、(1) c. のように、比較の対象が明示されて始めて坐りの良い文になると説明する。即ち、一番目のハは「主題のハ」、二番目のハは「対照のハ」とみなし、この二者を全く別のハと考える。

しかし、時枝や久野が考えるように、二種のハは全く別種のものとして峻別できるものだろうか。ごく簡単な例をみてみよう。

1 但し、ハに「題目提示」「対比」以外の用法を認める先行研究として、尾上 [1995]、竹林 [2004]、堀川 [2007] なども存在する。

(2) 小野先生は東京に行った。

この場合、通常、題目を提示するハと言われる。ところが、次のようにこの後に、次のような第二文を続けると一転して対比の色を帯びる。

(3) 小野先生は東京に行った。黒田先生は北海道に行った。

この場合の第一文は(2)と全く同じであるにもかかわらず「対比」のハだといわれる。しかしここで重要なことは、(3)のハが対比の色を帯びたからといって、題目を提示する機能が失われたわけでは決してないことである。(3)のハは「題目提示」の機能を全く失うことなく、それに加えて「対比」の色合いを帯びており、「題目提示」かつ「対比」と言わざるをえない。このような簡単な考察からもわかるように、「題目提示」と「対比」は二者択一的な関係では決してなく、「題目提示のハ」と「対比のハ」の二種類のハがあるかのごとき記述は、この事実在即してみればはずれた見解と言える。両者は決して相互排他的な関係ではなく、同じハの中に完全に共存してかまわない意味効果なのである。

もちろん、二種のハを別物として峻別するのではなく、「題目提示」かつ「対比」のハを認める論者も、佐藤 [1976] や野田時寛 [1988]、野田尚史 [1996] など少なくとも、鄭 [1993] や、富岡 [2010] では、「題目提示」かつ「対比」のハを明確に「対照主題」という名称で呼んでいる。

しかし、ここで留意しなければならないのは、「対比」かつ「題目提示」のハを認めたとしても、ハの機能を「題目提示」または「対比」のいずれかに限るという前提にたつ限り、「対比」でないことが論理的に「題目提示」であることを意味する点はかわりがない。このような見解は、寺村 [1991: 41] において明確に見られる。寺村は、ハの「題目提示」と「対比」との関係性を次のように述べる。

本書では、「ハ」の、文中でのある要素をとくに際立たせ、ある対比的効果を生じさせる働きを基本と見、それがあつた条件下で、対比の相手である影の存在が意識されず、単にそこに聞き手の注意をとくに惹きつけて、あとの陳述と結びつけるだけの場合を、「(単なる)主題」を表わすものとする。

要するに寺村は、ハの基本的機能を「対比」と見た上で、対比の相手が想定しにくい場合、即ち「対比」でない場合には「題目提示」になるというように考えているのである。その上で、寺村 [1991: 42] では「題目提示」かつ「対比」になる例があることを認めるのであるが、それは、「対比」でなければ「題目提示」であるとする見解と決して矛盾するわけではなく、論理的には両立するのである。

上述のように、「対比」でなければ、ハ即ち、題目を提示する助詞だ、という見解がうまれる背景には、実際、「題目提示のハ」と「対比のハ」が二者択一的に思われる言語事

実が確かに存在することであろう。具体的には、ハの中でいかにも題目提示らしいハは対比の色が薄く、一方、対比らしいハは題目提示ではないことが多いという事実があるように思える。

ハの中で題目提示らしい題目提示といえ、情態形容詞（属性形容詞）の文に使われるハが最も典型的である。「雪は白い」「地球は丸い」など、属性を語る形容詞において属性の持ち主はハで示されるのが普通でありこれは典型的に題目提示らしい題目提示の用法であるが、この場合、特別な文脈の中におかれるのでない限り「対比」の色は全くない。これに対して動詞文でデ格項やカラ格項が題目化された場合は、かなり事情が異なる。動詞文デ格項やカラ格項を題目化しようとするれば、デやカラを落として題目化することは強力な対比文脈の中におかれるのでなければ原則として不可能で、「○○デハ」や「○○カラハ」のように、「○○+格助詞+ハ」の形にしなければならない<sup>2</sup>。

- (4) 札幌で、味噌ラーメンを食べた。
- (5) 札幌では、味噌ラーメンを食べた。
- (6) 札幌は、味噌ラーメンを食べた。

(4) のデ格項を題目化しようとするれば、(5) のように「○○デハ」の形にするのが普通であり、(6) のように「○○ハ」の形は、非常に強力な対比文脈があるのでなければ許容されない。

- (7) 4月から、別の者が担当します。
- (8) 4月からは、別の者が担当します
- (9) 4月は、別の者が担当します。

(7) のカラ格項を題目化しようとするれば(8) でなければならず、格助詞を落とした(9) では元の文を題目化した文とはもはや言えなくなってしまう。格助詞を残した形の「○○+格助詞+ハ」の形はもはや典型的な題目語とはいえず、通常、対比の色合いが出る。つまり題目提示らしい題目提示用法のハは対比の色がなく、典型的とはいえない題目提示用法のハの場合には対比の色が出やすい、という傾向が認められるように見える。

一方、最も対比らしい対比、つまり文脈の支えとは無関係に、その一文だけ見ても強力な対比の色を感じる最たるケースとは、副詞句にハがついた場合である。

- (10) きれいには書きました。
- (11) 早くは歩けません。

2 三上 [1960] は、デ格項の題目化の例として「会場は余興が始まっている。」を挙げているが、堀川 [2010b] これはデ格項の題目化としてみるべきではなく、場所の状況語の題目化と考えるべきだという見方を示した。

- (12) ゆっくりとは見物できなかった。
- (13) ぴかぴかには磨いた。

これらの表現においては間違いなく対比を色濃く感じるが、一方、典型的な題目語が「名詞句+ハ」の形であるとすれば、「副詞句+ハ」は通常、題目語とはいいいにくく、仮に題目語を広く規定する立場にたつてこれを題目語に含める立場に立ったとしても典型的な題目語と言いがたい。また、「副詞句+ハ」でなくとも、名詞句+デ・ト・カラ・マデなどの格助詞にハがついた場合も、ほとんどの場合、対比の色が出る。

- (14) この薬では治りません。
- (15) 花子とはデートしたことがあります。
- (16) このクラスからは合格者が出なかった。
- (17) 3月までは現行の体制で進めます。

これらはすべて、対比の色が色濃く感じられることと、「○○+格助詞+ハ」という形であり典型的な題目語とはいえないことが連動しているように思われる。このような例から判断すれば、ハの中で対比を色濃く感じる対比らしい対比という用法とは、題目提示用法のハからは最も遠い位置にあるとあってよさそうである。

以上の観察に基づけば、「題目提示」と「対比」というハの二つの用法は、相互排他的で、一方の用法に傾けばもう一方の用法とは読みにくくなる、という関係が成り立っているように思われる。このことが、ハに、「題目提示のハ」と「対比のハ」という二種類のハがあるというような記述が出てくる原因の一つだといってもよい。

しかしながら、そもそも、尾上 [1995] が指摘する通り、あるハが題目を提示しているかどうかが決まるレベルと、対比と言えるかどうかが決まるレベルは全く別の次元である。題目語かどうかを決定するのは、あくまで一文中においてハの前後において表現上の立場が異なる二者を結び付けているかどうかという次元の問題であり、あくまでシンタグマティックな関係である。一方、対比かどうかは、当該の文で語られる事態と他の文で語られる事態との関係で決まる次元で、パラダイグマティックな関係で決まる問題である。形式的には「名詞句+ハ」であっても、その名詞句と他の名詞句という項目単位の対比ではなく、あくまで文事態全体と他の事態との関係を語るのが「対比」という意味効果である。両者は異なる次元にかかわる意味効果である以上、両者を同じレベルにおいて、「対比」でなければ「題目提示」であるとみるのは妥当とはいえない。寺村 [1991] の主張に沿って言えば、対比の相手である影の存在が意識されない場合とは、単に、対比の色が出ない場合に過ぎず、そのことと題目を提示することは論理的に同値ではないのである。

## 2. 「題目提示」でも「対比」でもないハ

前章で見たように、「題目提示」と「対比」が二者択一的なものでなく相互に独立の次

元で決まるものだとすれば、論理的に言って、対比の色がないことが直ちに無条件で題目提示ではない。つまり、対比でも題目提示でもないハが論理的にありえることになる。このようなハについて、尾上 [1995] は「額縁的詠嘆」と呼び、次のような例を挙げる。

- (18) 飲んで騒いで丘にのぼれば はるかクナシりに白夜はあける (森繁久弥作詞「知床旅情」)
- (19) 雨はふるふる 城が島の磯に 利休鼠の雨がふる (北原白秋作詞『城が島の雨』)

この場合、対比でないことは明らかであるのに加え、「白夜」は表現上の前提基盤項目ではなく題目を提示しているとはいえない。即ち、「白夜」をめぐる表現を始めることを話し手と聞き手が共に了解し、さらに「白夜は」で一旦、息継ぎをおいた後に後続の伝達主要部がおかれるという構成にはなっていない。簡単にいえば、「白夜はどうなったのか」という問いに対し「白夜はあけた」という情報を提供する文ではなく、「白夜」を題目語というわけにはいかないのである。

このように対比ではないが、題目提示とも言えない「額縁的詠嘆」のハについては、堀川 [2007] でも万葉集の例を中心に挙げたことがあるが、この種の例は、古代語には多く見られるものの、現代語においては、尾上が挙げる例も含め、次のように、歌の歌詞などやや古風な文体のものに限られる。

- (20) 松原遠く消ゆるところ 白帆の波は浮かぶ (文部省唱歌「海」)
- (21) 岬のはずれに少年は魚釣り<sup>3</sup> (谷村新司作詞「いい日旅立ち」)

一方、現代語において、歌の歌詞などではなく、純粹に散文的な表現の中にも、次のように、対比でも題目提示でもない例が存在する。

- (22) ビールは冷えた。そろそろ宴会を始めよう。
- (23) 街に電飾は灯った。クリスマスも近いなあ。

これらの場合、尾上がいうような「詠嘆」の意味は出ず「額縁的詠嘆」とはいいがたいことに留意する必要がある。このようなハは注意深く見なければ「題目提示」または「対比」の用法として見逃される可能性が高いが、これらの「○○ハ」は「ビール」や「電飾」をめぐる「ビールがどうであるか」「電飾がどうなったのか」というような情報を伝える表現とはいえない。つまり「ビール」や「電飾」は表現上の前提基盤項目ではなく「題

3 (21) は「岬のはずれで」ではなく「岬のはずれに」である点にも留意する必要がある。デであれば単に少年の動作を語る文になりきわめて散文的であるが、ニを用いることにより、少年の魚釣りが風景全体の中に溶け込み、少年の動作を語る表現から場面全体の情景を語る文に移行し詩的な効果が生まれる。なお、この文でデではなくニを用いることがもたらす特別な表現効果については、2009年度大阪大学外国語学部日本語専攻卒業論文において師井恵子君が指摘している。

目提示」とはいえない。また「ジュースはまだ冷えていないが、ビールは冷えた」など対比文脈の中に発せられれば別の意味で安定することは確かだが、そのような文脈の中におかれるのでなくとも使われるのであり、(22) (23) が対比でもないことは明らかである。ここでは、宴会の準備としてさまざまなことがあろうがその中で「ビールが冷えた」ことを宴会開始が可能になった象徴的なできごとととらえたからこそハが使われるのであり、街に電飾が灯ったことをクリスマスが近づいてきたことを示す象徴的なできごとだととらえるからこそハが用いられているのである。即ち、ある事態を象徴的に一言で表わすのにハが使われているのであり、明らかに「対比」でも「題目提示」でもない。このような「象徴的事態を表すハ」の例があることを見ると、対比でないハが無条件に題目を提示すると決っているわけではないことが明確に了解されるであろう<sup>4</sup>。

三上 [1960] 以来、「有題文」と「無題文」という用語で、ある文に題目語があるか否かで二種の文に分けるとする議論がなされることがよくある。しかしこのような議論においては「題目語とは何か」を正面から問うた上で、ある文に「題目語」があるかどうかで二者を分類するのではなく、形式的に「ハ」の有無によって分類されることがほとんどである<sup>5</sup>。この用語法そのものが、ハという助詞が題目を提示する助詞である、という前提をベースにしているのであるが、それはハの本性に従って言えば、妥当とはいえないのである。

そもそも、ハに「題目提示のハ」と「対比のハ」があるとする見方は、助詞論と題目語論を意識的に分けずに論じることに疑いをもたないことに由来する。ハという助詞がこの助詞の個性として、あるいは固有の論理としてどういう性質を持つのかを問う「助詞論」と、題目語とは何か、題目語をどのように規定するのが日本語の文法論にとって意味がある議論になるのか、という問題を問う「題目語論」は、本来、別物、独立のものなのである。ところが、この両者を安易に重ね合わせると、ハという助詞イコール「題目を提示する助詞」または「対比を表す助詞」という整理することになり、対比でなければハが使われている限り必ず題目を提示すると言わなければならない。しかしこれは事実と反するのである。

「助詞論」と「題目語論」を分けて考える立場に立てば、ハという助詞それ自体が本質的に「題目提示」または「対比」という意味を表すのではなく、ハという助詞の持つ固有の個性を何らかに適用させた結果、「題目提示」や「対比」あるいはその両方の表現効果が出ることもある、という整理をすることになる。また「題目語論」としては、日本語文法において「題目語」という文法用語をどのように規定するのが文法論において最も説得的な議論ができるか、という観点で「題目語」の内実を検討する議論が必要ということに

4 「題目提示」「対比」以外のハの用法として竹林 [2004] は、「東京は神田の生まれだ」のハ、「そんな本、誰も読みはしないよ」のハ、「熙子（ひろこ）が明智光秀の妻となって、20年の歳月は流れた」のハの三種を挙げている。

5 但し、三上 [1970] は、「ダレガ到着シタ」に対する応答「偏理ガ到着シタンデス」をハが表面的には使われていないが「陰題」の文として有題文の一種に含める。



なる。この議論は、ハという助詞の個性を論じる論とは独立に論じられるべきであるが、もちろん結果として、「題目語」を表すのに「ハ」という助詞を使うことができる、という結論に至るのは問題はない。この立場にたてば、「ハ」を使えばいつでも題目提示（または対比）になるわけではなく、また逆に、ハ以外の助詞であっても、さらには助詞なしでも題目提示をすることができるという論が自然に展開される。例えば、丹羽 [2006] は「～って」「～についていえば」「～なら」という形式が題目を提示する可能性および、助詞なしの「名詞句 +  $\alpha$ 」という形が無助詞の題目と言える可能性を論じている<sup>6</sup>。

以上述べたように、助詞論と題目語論を明確に分けた上で論じた文献に尾上 [1995] がある。尾上によれば、助詞論として「ハ」は「前後両項の結合（通常は文そのもの）の成立を分説的に（他の事態との対立の意識をもって）承認する」助詞だという。一方、題目語論として日本語の題目語の要件を次のように整理する。

- ① 一文の中で、その成分が表現伝達上の前提部分という立場にある。
  - ①-a 表現の流れにおいて、その部分が全体の中から仕切り出されて特別な位置にある。
  - ①-b その成分は、後続の伝達主要部分の内容がそれと決定されるために必要な原理的先行固定部分である。
- ②その成分が、後続部分の説明対象になっている。

尾上が題目語の要件として大きく二つの異なる次元の要件が必要だと考えたのはなぜか。まず①の要件であるが、「P ハ Q」において P が題目語と言えるために最も重要なことは、P と Q の間に断裂、切れ目があるということである。つまり、P をまず表現の前提として固定した上で、そこに切れ目を置いた上で、後続の伝達主要部分 Q が結び付けられるという関係がなりたつということがポイントである。P と Q が表現伝達上、その立場が一樣ではない点を重視した上で両者の関係把握であることが重要である。題目語の要件として、①の「断裂要件」に加えて、②を入れたのは「意味要件」も必要だということである。意味要件が必要だと言うのは、次のように敷衍することができる。歌を歌うにあたってどこかで息継ぎをする必要がある場合、どこで息継ぎを入れ切れ目を入れるかはまずは息の都合が優先されるだろう。しかし、いくら息の都合とはいえ、息継ぎの前後で意味的に全くつながらない前後二項の間に切れ目が入ると具合が悪い。やはり意味的に前後が無理なくつながる箇所にしか息継ぎは入れられないのである。つまり、切れ目の前後は何らかの意味的な連関が必要であり、それを尾上の規定では「説明対象」でなければならない、といったのである。しかし、この意味要件は非常にあいまいで、「説明対象」というのは何を以て「説明」というのか明示的にいうのは非常に難しい。さらにいえば、本質的には「説明」という関係ではなくても、前後の結合が意味的に自然に了解されるも

6 最近、岩男 [2008] が「って」による題目提示について詳しい議論を展開している。

のであればよいのである。例えば、

(24) 梅田方面にお急ぎの方は、2番線の特急が早く着きます。

のような場合の「〇〇ハ」は説明対象ではなく、後続部分の情報を呼びかける相手としかいいようがない場合である。このような場合も題目語に入れるなら、尾上が規定した意味要件をより詳細に明示的にいう必要がある。堀川 [2005] 以来、堀川 [2006]、堀川 [2010a] で論じてきたのは、この意味要件の明示化の試みにほかならない。

### 3. 「主題」とは談話上の概念か

日本語の主題（題目・題目語）を論じた文献を紐解くと、この用語に対して明確な規定が与えられないまま、研究者によって二種の非常に異なる意味合いで用いられていることがわかる。一つは、「主題」とはあくまで一文の中で、表現上特別な立場にあるものを指す概念だという見方、もう一つは「主題」とは談話・テキストのレベルに関係するものだという見方である。

三上章の論の中に、既にこの両方の意味での「主題」が論じられている。その一つは三上が「ピリオド超え」と名づけている現象をめぐって「主題」を論じる議論がある [三上 1960: 118]。三上は、以下のテキストにおいて、第一文において提示されている題目がその一文だけでなく、ピリオド（句点）を越えて、後続の複数の文にまたがって題目として機能していると主張する。即ち、後続文すべてについて、第一文における「吾輩」が題目として機能しているというわけである。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたか頓と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャーないて居た事丈は記憶して居る。吾輩はここで始めて人間といふものを見た。

これは、三上が、題目を、一文中のものではなく、むしろ談話・テキスト的なものとしてとらえた見解だと考えられる。その一方で三上は次のようにも言う。

題目の提示「Xハ」は、だいたい「Xニツイテ言エバ」の心持ちです。上の「Xニツイテ」は中身の予告です。下の「言エバ」は話し手の態度の宣言であり、これが述部の言い切り（文末）と呼応します。[三上 1960: 8]

三上のこの見解は、主題を一文中におけるある成分と残りの部分との意味関係を指して題述関係といているのであり、ここでは談話・テキスト的に主題をとらえてはいない。このように、元々、三上の中にも主題を、一文中の概念としてとらえる議論と、談話・テキストの概念としてとらえる議論の両方が含まれることがわかる。

益岡 [2004] はこの事情を「文内主題」と「談話・テキスト主題」という用語を用いて簡潔に整理している。益岡によれば、日本語の主題には文レベルの主題と談話・テキストレベルの主題があり、前者は属性叙述文をベースにしているのに対し、後者は事象叙述文が談話・テキスト上の要請によって主題化されると主張する。属性叙述文、例えば、

(25) 雪は白い。

という文は、「雪」という属性の持ち主と、「白い」という属性の結合によって構成されており、この時の「雪」は典型的に「文内主題」である。一方、

(26) 今年バンクーバーでオリンピックがあった。オリンピックに参加したA選手はみごと銀メダルを獲得した。

における「オリンピックに参加したA選手」は先行発話に関連する対象なので談話・テキストレベル上の要請による主題、即ち「談話・テキスト主題」ということになる。もっとも益岡氏は両者の区別について、「属性叙述文」と「事象叙述文」という叙述の種類の違いが二種の主題の違いに対応するという立場をとっている。つまり事象叙述文が主題を持つ場合、その主題は文の内部的な動機により与えられるものではなく、あくまで談話・テキスト的な要請によって与えられるものだという。

また、砂川 [2003] は、文レベルの主題と談話レベルの主題という二者を認めた上で、両者の関係について、次のように述べる。

文の主題構造は談話の主題展開に大きな影響を与え、逆に談話の主題展開のあり方が、そこで用いる文の主題構造の選択に大きな影響を与える。このように、文の主題と談話の主題は相互に深く影響を与えながら談話の構成にあずかっているのである。[砂川 2003: 52]

砂川は、文の主題と談話の主題を区別し両者は相互に影響を与え合うものの、結局は両者とも「談話の構成にあずかる」と述べるように、「主題」を談話上の概念としてみることに重きをおいた見解だといえる。

そもそも、「主題（題目・題目語）」という用語が一文中のある成分を指す用語なのか、一文を超えた次元にかかわる用語なのか、という立場の相違は、日本語研究においては松下 [1928] の次の記述をどう解釈するかにかかっていると見てよい。

連用の語の運用は必ず題目態か平説態かの一方に在る。そうして其の何れを使ふべきか厳正な規則に由って支配される。決して妄に使ふことはない。この規則は実に日本語の生命と云つても善い位に重要なものである。其の規則は次の如くである。

与へられた既定不可変の概念を連用的概念として表す場合には必ず題目態を用ゐる。未定, 可変の概念を連用的概念として表す場合には必ず平説態を用ゐる。判定の対象は判定の前から既定動かすべからざるものである。所が判定に使ふ材料は判定の都合で説話者が勝手に使ふのであるから, 未定, 可変, 自由なものである。此の未定, 可変, 自由なものは絶対に題目にはならない。其れへ若し題目態を使つたら飛んでもない意味になる。

この松下の記述に対し、「既定, 不可変の概念と言うのは既知の情報のことである。未定, 可変, 自由の概念というのは, 未知の情報である。」と述べて, 松下の考えを「既知-未知」説の出発点として解釈したのは, 北原 [1981] である。北原はさらに明確に「～は」は既知の情報を表わし, 「～が」は未知の情報を表わす, と主張する [北原 1981: 257]。

これに対し尾上 [2005] は, 北原の解釈と異なり, 松下は文脈上既出, 既知といったわけではなく, 一文内での他の部分 (解説部分) との関係において「既定不可変」「選択不自由」と言っているのだ, と解釈する。尾上は, 松下 [1928] において「題目は, 即ち問題である。判定の対象の予定的提示である」「解説に先立って先づ定められ」「判定の対象は判定の前から既定動かすべからざるものである」などの説明があることを根拠に, このように主張する。

また, 松下の考えの延長上としてではなく別個に「既知-未知」説を唱えたのが大野 [1978] である。大野はハとガを考えるにあたっては「言葉の上での文脈, さらに事実の上での文脈 (話し手と聞き手の間で, 言語以前の事実についてどんな諒解が存在したのか) について深く考えるべきだと思う。」と述べた上で, 既知 (あるいは既知扱い) の下にハという助詞を使い, 未知 (あるいは未知扱い) の下にガという助詞を使う, と主張する。これは明らかに, ハとガの使い分けが文脈によって決まると考えており, その点において北原の考えと基本的に共通である一方, 尾上の考えとは全く異なることがわかる。

この大野の主張は一見したところ久野 [1973] の主張の延長上にあるように思われるのだが, 久野 [1973] や最近の高見・久野 [2006] を丁寧に読むと, 実は久野と大野の主張は本質的に別物であることがわかる。久野説において, ハの説明に用いる基準とガの説明に用いる基準はあくまで別であり, 同一次元でハとガの相違をみているのではない点が重要である。

高見・久野 [2006] によると, ハでマークされる名詞句は「指示対象既知」名詞句でなければならないという。ここでいう指示対象が未知か既知かという概念は先行文脈と直接は関係ない概念で, 「私, 君の奥さん」など指示対象が明らかなものや, 話し手, 聞き手間で了解済みの概念 (人間, 動物, 国家など) も指示対象既知に含まれる。一方, 「新情報」「旧情報」という概念は「未知」「既知」という概念とは全く別で先行文脈から予測できない情報かできる情報か, という「先行文脈」にかかわる概念だととらえる。つまり「新情報」とは先行文脈から予測できない情報という意味であり「指示対象未知」という意味ではないのである。このような道具立ての上になつて, ハは指示対象既知という先行文脈と

直接は関係ない概念装置で説明される一方、ガは「新情報」という先行文脈との関連で規定できる概念で説明されており、両者は別次元で規定されていることになる。

つまり、久野説においてガの説明には「先行文脈から予測できるか否か」で「新情報」と「旧情報」を分ける次元の説明装置を用いたのであるが、これは、ハの説明に用いた「既知」「未知」とはあくまで別次元であり、ハが先行文脈から予測できる「旧情報」を表わすとは久野は全くいっていないのである。にもかかわらず、ハの説明における「既知」を「旧情報」と安易に重ね合わせ、ハとガを同一次元の尺度の説明原理でとらえようとしたのが大野 [1978] なのである。久野はハについて文脈情報に関連するものとは全く考えていなかったにもかかわらず、大野の読み替えによってハが文脈とおおいに関係がある談話・テキストと関係が深いものと考えられるようになったのである。このように、久野説と大野説が似て非なるものであることはあらためて強調しておく必要がある。

ここで、海外の研究に目を転じてこの問題に関する Halliday [1970] の見解を見てみたい。

What the speaker puts first is the theme of the clause, the remainder being the 'rheme'. While given- new is a structure not of the clause but of the information unit, and is realized not by sequence but by intonation, theme-rheme on the other hand is a structure of the clause, and is realized by the sequence of element: the theme comes first. [Halliday 1970: 356]

ハリディは、明確に 'given- new' は一文を超えた情報ユニットの構造であるのに対し、'theme-rheme' はあくまでも節の構造の問題だと言っている。もっともハリディは続けて次のようにも言う。

The meaning of theme is not the same of 'given', although the two function are often realized by the same element, or overlapping elements---  
[Halliday 1970: 356]

つまり、'given' と 'theme' は同じではないのだが、両者が重なり合うことが多いのも確かだというわけである。

確かに、既知項目が題目語になることが多いのは事実である。もちろん既知を「文脈上既出」と読みかえるのは強すぎる解釈で、そうでなくとも先行文脈から引き出される情報や、一般的な共通了解として知られる情報（「太陽は・・・」「鳩山首相は・・・」など）は既知扱いできるであろう。しかしそこまで「既知」を広義に解釈するとしても、それは本質的なことではなく、依然として、「既知」とは決していけない項目が「題目語」になる場合が存在するのも事実である。

(27) タイ料理, 何か食べたことある?

という問いに対する応答として,

(28) トムヤムクンは食べたことがあります。

という問答の場合, この応答中のハは既知項目とは絶対にいえないが, 表現上の前提部分であり「題目語」であることにはまちがいない。つまり, 題目語は既知項目の場合が多いかもしれないが, 既知でない場合も確かに存在するのである。

なお, (28) のハはそもそも対比を表わすのだから題目提示ではなく, 従って「既知」でなくても問題はないのではないかという批判があるかもしれない。しかしその批判に与することはできないのは, 本稿で繰り返し述べた通り, 対比の色を帯びることは直ちに題目提示でないことを意味するわけではなく, この例は, 対比でありかつ題目提示の例だと考えられるからである。

以上の見解を整理すれば, 確かに既知項目が題目語になる場合が多いものの, それは「PハQ」という表現の表現伝達上の前提項目になりやすい, というだけで, そうとは限らず, 既知でなくても他に何らかの条件が整えば前提項目になりうるのである。この事実に鑑み, 本稿では, 「主題(題目・題目語)」という概念は, 基本的に一文中の特定の成分を指す用語であり, 談話・テクスト的な関係をみるのは本質的ではないという立場にたつ。これは結局, ハリディ, 久野, 尾上が主張していることと基本的には同じ見方にたつということである。

「主題」を談話上の概念ではなく, あくまで一文中の特定の成分を指すという本稿の立場は, ハという助詞を副助詞ではなく係助詞として位置づけるという考え方がベースになっている。ハはもともと係助詞として, 一文中におけるある一点において一文を二項に分離するという機能を持つ。その上で, 分離した二つの部分を結合して何らかの意味のある世界を語ることになる。これは尾上 [1981] で示された「二分結合」という考え方であるが, このように, 題目提示のハは一面では一文を鋭く二つの部分に分離するという機能を持ち, 一面でそれをつなぐ機能を果たすという二面性を持つ。この時, 分離された第一部分が「主題」になりうるのであり, ここではあくまで一文内で規定される概念として「主題」を想定する必要があることになる。

本稿の見方にたてば, 益岡がいう「文内主題」と「談話・テクスト的主题」の区別を, 「属性叙述文」と「事象叙述文」という種類の違いに対応させて考えるのは, 必ずしも妥当とはいえないことになる。事象叙述文であっても主題を持つか否かは, やはり一文を全体として断裂を含まないひとまとまりのものとして語る表現スタイルを採用するか, ある成分を表現上の前提基盤項目にたてた上でいったん切れ目を置きそれと後続の伝達主要部分を結合させるという表現スタイルをとるか, という話者の選択による。もちろんそのような断裂を含む表現スタイルを選ぶか否かに関して, 談話・テクスト的な要因が全く無関係で

はないかもしれない。しかし、それはあくまで付随的な事項に過ぎないのである。

本稿で繰り返し述べてきたように、ハという助詞は助詞そのものの個性としてあらかじめ「題目提示」や「対比」という機能を担っているのではない。それは結果的に出てくる表現効果であり、この助詞の本質そのものではない。額縁的詠嘆のハや象徴的事態を表すハの用法があることは、そのことを如実に物語る。

#### (参考文献)

- 岩男考哲 2008. 「「って」提題文の表す属性と使用の広がり」, 益岡隆志 (編) 『叙述類型論』くろしお出版 pp45-66.
- 大野 晋 1978. 『日本語の文法を考える』 岩波書店.
- 尾上圭介 1981. 「「は」の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』 58-5.
- 尾上圭介 1995. 「「は」の意味分化の論理- 題目提示と対比」『言語』 24-11, pp28-37.
- 菊地康人 1995. 「「は」構文の概観」, 益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (編) 『日本語の主題と取り立て』くろしお出版 pp37-69.
- 北原保雄 1981. 『日本語の文法 (日本語の世界 6)』 中央公論社.
- 久野 暲 1973. 『日本文法研究』 大修館書店.
- 佐藤ちゑ子 1976. 「主題化に関する主格名詞句の特性について」 佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集刊行会 (編) 『国語学論集』 pp929-952 表現社.
- 砂川有里子 2003 「日本語コンピュータ文の構造と談話機能」, 上田博人 (編) 『日本語学と言語教育』 東京大学出版会. pp39-70.
- 砂川有里子 2005. 『文法と談話の接点』 くろしお出版.
- 高見健一・久野暲 2006. 『日本語機能的構文研究』 大修館書店.
- 竹林一志 2004. 『現代日本語における主部の本質と諸相』 くろしお出版.
- 鄭 聖汝 1993. 「「が」と「は」の意味、その背景と形態」『世界の日本語教育』 3, pp121-145.
- 富岡 論 2010. 近刊「発話行為と対照主題」, 長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究：命題を超えて』 開拓社.
- 野田時寛 1988. 「「名詞句+は」の用法—「主題」と「対照」について—」『日本語学校論集』 12, pp65-84 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
- 野田尚史 1996. 「「は」と「が」」くろしお出版.
- 丹羽哲也 2006. 『日本語の題目文』 和泉書院.
- 堀川智也 2005. 「「典型的な題目語」の意味的立場」『日本語文法』 5-1, pp39-54.
- 堀川智也 2006. 「ヲ格項・ニ格項の題目化」『大阪外国語大学論集』 34, pp21-35.
- 堀川智也 2007. 「「対比」でも「題目提示」でもない「ハ」-万葉集の用例を中心に-」『日本語・日本文化研究』 17, 大阪外国語大学日本語講座 pp14-28.
- 堀川智也 2010a 「「題目語」と「呼びかけ」の関係」『大阪大学世界言語研究センター論集』 2 pp19-33.
- 堀川智也 2010b. 「場所名詞の題目化」『大阪大学世界言語研究センター論集』 3 pp191-205.
- 益岡隆志 2004. 「日本語の主題-叙述の類型の観点から-」, 益岡隆志 (編) 『主題の対照』 くろしお出版 pp3-17.
- 松下大三郎 1928. 『改撰標準日本文法』 紀元社.
- 三上 章 1960. 『象は鼻が長い』 くろしお出版.
- 三上 章 1970. 『文法小論集』 くろしお出版.
- Chafe, W. L. 1976. Givenness, Contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view. in C. N. Li (ed.) 1976. *Topic and subject*. Academic Press. 27-55.
- Danes, F. 1974. Functional sentence perspective and the organization of the text. In F. Danes (ed.)

- Papers on Functional Sentence Perspective. Hague/Paris, Mouton. 106 – 128.
- Firbas, J. 1964. On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis. *Travaux Linguistique de Prague*, 1. 267 – 280.
- Givon, T. (ed.) 1983. *Topic continuity in discourse*. (Typological Studies in Language 3)  
Amsterdam, John Benjamin's.
- Halliday, M. A. K. 1970. *Functional diversity in language as seen from a consideration of modality and mood in English* In Foundations of Language, Holland:Reidel 6. 2 323 – 361.
- Mathesius, V. 1927/1983. Functional linguistics. In J. Vachek (ed.) *Praguiana: some basic and less-known aspects of the Prague linguistics school*. Amsterdam, John Benjamin's.

(2010. 07. 16 受理)



